



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第二五三号）

夏至 六月二十一日

シヤグジ

一年で最も昼間の長い夏至の日。二見興玉神社では夏至祭が行われ、夫婦岩の二つの岩の間から昇る朝日を見ます。昼間が最も短い冬至は全国的にもさまざまな習慣が残りますが、夏至にいたっては梅雨最中のせい、あまり聞きません。そんな中、夏至祭が行われるのは二見の地が太陽信仰の根強い土地柄であることを伺わせます。

神社名の興玉について、『二見町史』には、「興玉神は海神であり、沖つ神が興玉神石、中つ神が立石（夫婦岩）、辺つ神が三宮神の岩窟と考えられるが、二見に住みついた海人部族の信仰した神」とあります。

三宮神は、三狐神、社護神とも書き、「シヤグジ」と呼びます。現在の神社参道にある「天の岩屋」は、シヤグジの祠と呼ばれていました。江戸末期の慶応年間の絵図には、三宮神社が記されています。もともと岩屋内に祀られていたシヤグジ神を茶屋地区の人々が現在の手洗場の南方の岩上に社殿を設け、氏神さまとしたようです。当時の篤い信仰がうかがえます。

興玉神石は、立石（夫婦岩）の沖合七七〇mの海中に鎮まる巨岩。社伝によれば、太古、天照大神を奉じた倭姫命が船を止めた地で、安政元年（一八五四）の大地震で海中に沈んだとされている霊石です。毎年五月にはこの巨岩に生える海藻（アマモ）を刈り取り、天日に干したものを被具や被守りの「無垢塩草」として授与するなど神聖視されています。

その興玉神石、神石の鳥居の役目を果たすとして太い注連縄を張る立石、そして、海辺の「天の岩屋」。三ヶ所の霊石は、太陽信仰と何か関わりがあるのでしょうか。夏至の太陽を太古の人々も拝んでいたのかもしれない。

文 千種清美

